重編諸天伝 訳注記（二）

一、現代語訳は、基本的に底本の句読点をもとに訳出しめたものである。しかし、稀に見られる難解な箇所や不明の語句については、訳文後の補釈や注が行われ、その訳を増補または省略することができ、増広する場合についても明示されていないため、ここでは参照しない。

二、各段の諸天の仏としての詩偈は、それぞれの伝記を略述したもので、伝記の現代語訳と重複することを避け、便宜上、書き下しの文のみを訳しつつ、各段の語句の注は、原則として、難解であると思われることにより、人名・地名・仏教的用語、そして引用された経典の所出に限っておく。

三、各段の名は、主に『重編諸天伝』を参照し、平成一八年『仏教講談』の講義の中で示した問題意識や感想などによる。さらに、表題『光明経文句』、『仏教経文句記』、『光明経文句新記』、宗曉『光明経文句記』、従来『光明経文句新記』、
訳注記

『金光明経注解』の四書を参考し、天台教義に関わる部分に注意して箇所を記し、天台教学における『重編諸経伝』の位置づけを示した。

百錄之一文乃云、『大梵尊王、三十三天、護世四王、金剛密迹、散脂大將』等五百眷屬。此依『光明』一『鬼神品』等、前後收束、列品中之文故也。四明法師移功德、大梵二位在後別召、乃準『散脂大將』一文之也。又約言之、明顯詰詰殊功。其所主者雖各不同、生善滅惡、其實同也。

此猶世之選用良將、特施異之、而超於品類。所以『百錄』令於仏座之左右安功德像、實在上奉此天。依経文列故、別敷好座、以待於我。故也。然後『百錄』又云、『若道場寬、更安大梵天王座』。所以後人又加梵・釈等。是知止一席之設、非常儀耳。其事同也。

又若約其本、無非皆是大菩薩等。若以列次、莫非就詣。又約言之、明顯詰詰殊功。其所主者雖各不同、生善滅惡、其實同也。

今先出如常仏会所主之次者。具如本伝以詳明之。

尊特之主、非薬叉同名之者。又詰利帝南鬼子母神、本只一位、或分二天。
隨其所求，令得成就，大功德天女為其女。

殷憂四部、外護三洲、韋驮天神、男為其男。

其梵、摭等，則就兩面，別分首排列之。有識之士，請熟思之。尚恐未曉，今示以圖。席列位既明，自然無誣。

若金光明道場中考，於仏左安功德天像，右安大弁天像。其梵、摭等，則就兩面，別分首排列之。有識之士，請熟思之。尚恐未曉，今示以圖。席列位既明，自然無誣。

『金光明經』於仏之配列次第，以【大梵尊天、三十三天、護世四王、金剛密迹、散脂大將、大弁天神、功德天神、訶利帝女鬼子母等五位的眷属】，排列之。有識之士，請熟思之。尚恐未曉，今示以圖。席列位既明，自然無誣。

運行月競、救助戈難、摩利支天女為其女。

有識之士，請熟思之。尚恐未曉，今示以圖。席列位既明，自然無誣。
これら古今の三説の根拠は、すべて『光明経』にあるもの
ここ、総論を以てこの難問を検討し、この難いに決着
をつけて、一般的に、諸天の位次を配列するに際しては、二種の方式が存在する。
第一種は、通常の仏道場のよう、諸天を一斉に奉請するものである。この場合、梵天や帝釈天、四天王などの諸天
在カなければならぬ。しかし、この方式で完成したわけでは、『光明経』の
散脂品や、功徳天品などの経文が示した
ように、いくつかの配列法が存在するものである。通産の仏会と
金光明会との区別があることによる。さらに、『孔雀屏』
の如く、仏陀世界主梵天王、帝釈、四天王、十八
大藥叉の配列を示すものもあった。このよう、
尚主剎その定仏と
本であり、大梵天や帝釈天は必ず先頭に置く、彼らは
色界を主宰する神であり、仏本の仏教に修行する八天の段階
においても、いつも先頭に立て仏教を守護したからである。

第二種は、『光明経』の内容を実修して、功徳天の教
えに依るものである。この場合、仏力を祈り、経典の説

の如く、疑問として、通常の仏会では、古より十六
天の像を示す。十六天はいずれも諸天を代表できる者で、
それぞれ主宰する所があるのではないいか。その中には、
諸天の言行に従い、それぞれの業績殊勲の相異
すでに明らかであり、諸天の主宰する所も異なるもの、
生善滅悪の立場においては、いずれも同じではないか。
しかし、諸天の
排順位を決めるならばならないのか。
宋代における『金光明懺法』の諸天排列問題

宋代の天台の僧侶は頻繁に金光明道場を設ける。「金光明懺法」を行っている。その理由の第一は、自己の修行のためである。隋の智顗が『摩訶止観』の中に「四種三昧を修行すること」が天台の学僧の主な修行法となった。第二は、民衆のためである。末法期である。雨乞いや地方の安泰など現実的利益の実現を目的とするものである。北宋の知礼や道原、南宋の温懐、覚先などが『金光明懺法』に引き行った雨乞いは、まさにその例である。

第三は、『金光明経』が護国思想を宣揚する経典である。宋は、数え方をとったのである。同時に、そのことにより国から信頼を得て、寺院は一層発展することになった。杭州の天竺寺は、宋が宋の初めに立てた金光明道場は、宋理宗（一二四五一一五六年の間に在位）によって『金光明三昧堂』という堂名を付けられたほどであった。

しかし、『重闇諸天伝』によれば、少なくとも宋の初めでは、金光明道場の諸天の排列方法に関して、天台内部においては異なる見解が存在した。まず、知礼の『金光明懺法』は、『金光明経』の散脂品に従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関し、天台が宗における主尊として招請した。これに対し、道原は、『金光明懺法』の主尊としての金光明道場、天台の諸天排列方法に関し、道原は、『金光明懺法』に従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関し、道原は、『金光明懺法』に従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関して、天台が宗における主尊として招請した。これに従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関し、天台が宗における主尊として招請した。これに従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関して、天台が宗における主尊として招請した。これに従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関して、天台が宗における主尊として招請した。これに従い、金光明道場、天台の諸天排列方法に関して、天台が宗における主尊として招請した。
摩利支天と韋駄天の加入

摩利支天の加入に伴う変更点。

1. 重編諸天伝
   - 金光明道場を再度重編する。
   - 金光明道場の規則を改定する。
   - 金光明道場の組織を整理する。

2. 金光明道場の規則
   - 新しく加入する摩利支天と韋駄天の役割を定める。
   - 金光明道場の組織を再構成する。
   - 金光明道場の規則を改定する。

3. 金光明道場の組織
   - 摩利支天と韋駄天の加入に伴い、組織を再構成する。
   - 新設の団体を設立する。
   - 既存の団体を改組する。

4. 金光明道場の規則
   - 新規加入の摩利支天と韋駄天の役割を定める。
   - 金光明道場の規則を改定する。
   - 金光明道場の組織を再構成する。

5. 金光明道場の組織
   - 新設の団体を設立する。
   - 既存の団体を改組する。
   - 新規加入の摩利支天と韋駄天の役割を定める。

6. 新加入者の役割
   - 摩利支天と韋駄天の役割を定める。
   - 金光明道場の規則を改定する。
   - 新設の団体を設立する。

7. 新加入者の役割
   - 摩利支天と韋駄天の役割を定める。
   - 金光明道場の規則を改定する。
   - 新設の団体を設立する。

8. 新加入者の役割
   - 摩利支天と韋駄天の役割を定める。
   - 金光明道場の規則を改定する。
   - 新設の団体を設立する。
「重編諸天伝」が定義した「十六天」の構成については、下方の末尾に於いて論説された。「仏祖統紀」を編纂した志磐は、次のように言う。

十六天に関する異論

磐磐案便南法は、『重編諸天伝』を勘定し「十六天」の名を南天、東南天、天女等、次に第二天、第三天、第四天等、共十六天、以此為定。通利此等翻理賈、當は此天、南天を諸天の一員として認めにしていなかった。『金光明経』に二天を取り入れたのは知礼の四世法孫の明中立である。

明中立の『金光明経』の増補は、行嘗の『重編諸天伝』に踏襲された。「重駕天」及び「摩利支天」の二天を「十六天」の一員として正式に規定した『重編諸天伝』の影響を受け、後世の金光明道場のほとんどが、この二天を奉った。
成尋が見た大弁功德天

日本の成尋（一〇一二～一〇八九）は、京都岩倉大雲寺の僧であり、六十二歳の時に、入宋し、浙江の天台山、山西の五台山などを参禅し、参天台山記」を著した。

その中に次のような記載が見られる。

（四月）　十九日　即日興教寺　寺教主諸僧同来。
藤吉良澄の『参天台五台山記の研究』平成十八年、関西大学出版センターでは、この『大弁仏経堂を大弁天女と解した。しかし、仏壇が実際に見たのは、宋代天台で頻繁に行われた金光明佛像を主尊である大弁天女と仏像に両隅に置かれたモニによって大弁天女と仏像の像を常置していたことである。

『重編諸仏伝』訳注記（二）（林）